

## II. 主 題

### 1 腹腔鏡補助下直腸手術症例の検討

野上 仁・山崎 俊幸・狩俣 弘幸  
横山 直行・桑原 史郎・大谷 哲也  
片柳 憲雄・斎藤 英樹

新潟市民病院外科

【対象】2002年4月から2007年9月に手術を施行された87例。

【結果】平均手術時間212.2分、平均出血量113.4ml。鏡視下手術完遂例で再建を要する75例について直腸切離法を検討。体内法71例、翻転法4例。体内法のうち、小開腹層から開腹手術用の縫合器を8例に使用。低位前方切除術症例で縫合器1個のみを使用した10例を検討。縫合器のアプローチは12mmポート1例、小開腹層6例、翻転法3例。12mmポートからのアプローチが困難な症例には小開腹創からのアプローチや翻転法が有効であった。術後合併症を14例に認め、創感染4例(4.6%)縫合不全1例(1.2%)。

【結語】腹腔鏡補助下直腸手術の短期成績は良好であった。適切な直腸切離法は確立されておらず、更なる工夫が必要である。

### 2 直腸癌括約筋温存術後の再建法別排便機能の経時的変化

小林 康雄・八木 実\*・飯合 恒夫  
谷 達夫・丸山 聡・岩谷 昭  
須田 和敬・島田 能史・高橋 聡  
畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科  
久留米大学外科学小児外科部門\*

【目的】直腸癌術後の排便機能の経時的状態変化を評価検討する。

【対象, 方法】再建方法別に、Ra直腸癌に対する低位前方切除術(LAR)施行例(Ra-LAR)(7例)(A群)、Rb直腸癌LAR施行例(Rb-LAR)(9例)(B群)、超低位前方切除術(SLAR) J pouch再建例(9例)(C群)、SLAR-Coloplasty pouch再建例(10例)(D群)に大別した。これらに臨床

スコア(Kellyスコア:KCS)、直腸肛門内圧検査に加えFecoflowmetryを実施し各因子の経時的変化を比較検討した。

【結果】1)経時的に有意に改善を示した因子は、A群のTR及びFmax、B群のRP、C群のAP及びTRであった。2)C群ではRP及びERが逆に経時的に低下する傾向を認めた。

【結語】直腸癌術後客観的排便機能評価は再建法に拘らず概ね、術後経過年数に伴い改善されるものと考えられた。

### 3 当科における潰瘍性大腸炎に対するW型回腸囊肛門吻合術の経験

桑原 明史・須田 武保・坂田 純  
金子 和弘・飯合 恒夫\*・畠山 勝義\*

日本歯科大医科病院外科

新潟大学大学院消化器・一般外科\*

潰瘍性大腸炎自験例7症例は、手術の絶対的適応2例、相対的適応5例であった。J型回腸囊で3期手術の1例以外、W型回腸囊肛門吻合を施行した。そのうち、3例に一時的人工肛門を置かない一期的手術予定し、最終的に2例に施行した。2期分割手術は4例であった。術後の合併症、入院経過、退院後の排便機能(排便回数、漏れ)に関し、一時的人工肛門造設の有無で差を認めなかった。近年、本邦・欧米から症例を選択することで回腸囊肛門吻合時の一時的人工肛門造設の有無で感染症や回腸囊関連合併症の頻度に差がないと報告されている。当科の経験からも、低侵襲な一時的人工肛門を置かない回腸囊肛門吻合術は選択肢の1つと考えられた。

### 4 大腸全摘、回腸囊肛門吻合術の長期成績と問題点

飯合 恒夫・谷 達夫・丸山 聡  
岩谷 昭・須田 和敬・島田 能史  
高橋 聡・畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科学分野

【目的】当科では、1985年以来UCとFAPに対

し大腸全摘，回腸囊肛門吻合術（IPAA）を行なってきた。その長期成績を検討し，問題点を明らかにする。

【対象】1985年から当科でIPAAを行なった162例。UC 137例，FAP 25例。UC：M:F = 72：65，平均年齢35.5歳，回腸囊W型124例J型13例。FAP：M:F = 14：11，平均年齢31.8歳，回腸囊W型22例J型3例。

【結果】手術関連死亡は，FAPで1例（セラチア感染症）認めた。UC，FAPとも術後の排便機能は比較的保たれており，ほとんどが社会復帰していた。女性では，妊娠も認められ，すべて正常に出産されていた。永久人工肛門になったのは，UC 4例FAP 2例であった。

【問題点】UCでは回腸囊炎が約15%に認められ，その診断，治療が今後の課題である。FAPでは，原病死が1例，胃癌での死亡が1例あり，そのほかの重複癌の発症もあったことより，早期発見，家族への啓蒙，術後の重複癌を念頭においたフォローが重要である。

## 平成19年度新潟精神医学会

日時 平成19年10月20日（土）  
午後1時10分～  
会場 ホテルセンチュリーイカヤ  
新館3F 万葉 東の間

### I. 一般演題

#### 1 昏迷状態を呈し，比較的短期間で改善した1症例

今井 紀子・吉浜 淳・松田ひろし  
立川メディカルセンター柏崎厚生  
病院精神科

【はじめに】昏迷状態を呈し，比較的短期間で改善した1症例について報告する。

症例は18歳，男性。

【家族歴】父方の祖母がうつ病にて通院歴があり。

【既往歴】特記すべきことなし。

【生活歴】2人同胞の長男として出生。

病前性格としては，おとなしく，内向的な面が強い性格であった。

中学校時代の文集では『人と話すのが苦手なので克服したい』と書いていた。

X-5年より「友人が周囲に気付かれないように悪口を一方的に言ってきたが，翌年には落ち着いた」，またX-2年に入ると，「再び周囲が自分のことを遠回しに言ってきた。言葉よりも態度で示されることが多くなり，徐々に嫌がらせがひどくなってきたような気がした」と語っていた。

その後，以上のような症状は消失していた。

【現病歴】X年4月大学へ入学し，親元を離れ単身生活を開始した。その後，夏休みのため帰省。両親から震災後のボランティアへの参加を勧められた。当日，向かう車内で「気持ちが悪い」と言いだし，表情はうつろで，冷汗・動悸が出現したため，ボランティアへ行くのを中止し帰宅した。夕方まで何も口にせず，涙をためて，全く反応を